

信じるものとも

第六卷

八月号

信じるものの喪失

オウム教
なぜにあれほど
簡単に
多くのインテリ
信じたか
もっと教育で
疑いを
教えるべきと
マスコミは言う

今ほどに
法とも言える
さまざまな
権威無くした
時代なく
信じるものを
失いし
時代は無いと
吾は思うに

重度・重複障害児

あるがまま
重度重複
障害児
仏のすがた
この世に示せり

人生を考え直して

みたい人は(二十)

『老子』解説(十九)

今月号は、第七十六章を取り上げます。

(第七十六章)人は、生きている間は、柔らかいのですが、死ぬと硬直します。万物も同様で、草木は生育している間は柔らかいのですが、死ぬと枯れて堅くなります。

ですから、堅く強いものは、死に属するものであり、柔らかで弱いものは、生に属するものと言えます。

例えば、兵力を誇るものはやがて滅び、木も堅すぎれば折れてしまうのです。それは、行き着くところ、強大であれば下に落ちつき、柔弱であれば上に憩うようになる、ということなのです。

この章も、きわめて深い真理を述べています。それだけに、これまでほとんど理解されていません。順次、解

説して行きます。

まず、最初の段落ですが、これは、たとえとして生きているものは柔らかいが、死ぬと堅くなる、ということ言っているだけです。ですから、どなたにもお分かりいただけることだと思います。

次いで、第二段落ですが、これは、右で言ったことを逆にして、堅く強いものは、死に属するもので、柔らかく弱いものは、生に属するものだと言っています。この部分も、多分、お分かりいただけるのではないかと思います。

難しいのは、第三段落の「兵力を誇るものはやがて滅びて行く」という部分以下のところですが、まず、この部分ですが、原語は「兵強則滅」です。これは「兵が強ければ、すなわち滅びる」と読みますが、でも、こんなことは、普通、理解できないことです。つまり、兵が強いのに負けるはずがない、と思ってしまうのです。私も、常識的には、それが当たり前だと思えますが、でも、ここではそんな俗っぽい常識を言っているのではないのです。常識を超えた、もっと深い真理の世界(道)に属することを言っているのです。

ですから、それが出来るだけ感じて頂けるように、私は、この部分を「兵を誇るものはやがて滅び」と訳して

おきました。このことの真実性は、歴史上どんな強力な武力を誇ったものでも、いつかは必ず滅びている事実を見れば明らかだと思えます。平家物語にいう「盛者必衰のことわり」というわけです。

この章でもっとも、分かりにくいのは、次いで出て来る「行き着くところ、強大であれば下に落ちつきませんが、柔弱であれば上に憩うようになる」という部分です。原語は「強大処下 柔弱処上」です。これは「強大であれば下におり、柔弱であれば上にいる」と読みます。

この部分を含んで、この章が理解できなくて、「老子は弱が強に勝つという原則を絶対化するのでは、かれの結論は実際の状況にあわず、それゆえまちがっているのではある。」と結論づけている解説書（昨年出版された、ほやほやの本）さえあります。老子もあの世で、苦笑していることだと思えます。かつて、第四十一章（昨年十一月号）で「『下土』と呼べる人は、『道』を聞くと馬鹿にして大笑いをします。でも、こうした人に笑われないようでは、『道』とは言えないのです。」という文が出てきました。まさしくこれを地で行く解説だと思えます。皆さんは、この章を読まれて、どうお考えになられましたでしょうか。私が読んだ本で、このように下土と呼べるような解説をしたものは、さすがに一つだけで、残

りは、道を聞いても半信半疑の『中土』と呼べるような人の解説ばかりでした。

以下、私なりの解説をしていきます。

この章のなかで、先ず、考えてみなければならぬのは、強と弱、強大と柔弱、という言葉の対です。

そもそも、ある人、ある家族、ある民族、ある宗教団体、ある国、といった人間ないし人間の集団が強いとは、どういうことなのでしょう。

人でも、家族でも、民族でも、宗教団体でも、国でも同じですが、話を具体的にするために国で考えてみますと、国が強いとか、強くなるためには、どうしたらよいでしょうか。そのためには、弱点がなかったり、弱点をなくする必要があるということだと思えます。

では、国の弱点はなんでしょうか。それは、経済的・文化的な生産財が乏しいこと、政治的に不安定であること、軍隊が弱いことなどだと思います。

ですから、強くなるためには勤勉に働いて、生産を増やし、政治を安定させ、軍隊を強くすればよいということになります。でも、こうしたことは、私の「自己・他己双対理論」によりますと、すべて「自己」に属することなのです。自国（の人々）の生存の可能性を高め、強大にすることなのです。

では、自己を強大にすることは、本当によいことなのでしょう。もし、そうだった時、人間はどうなるのでしょうか。そのことを考えてみたいと思います。

結論から先に言いますと、実は、人間は難儀なことに、自己を強大にするほど、自己に閉じ、自己を定位する外的な足場を失って行くのです。つまり、自己を不安定な存在にして行くのです。他者を常に、自己を支えるだけ（愛をもらうだけ）の存在としてみならずようになって行くのです。自己を空しくして他者を支えること（愛をあげること）ができなくなってしまうのです。それは、人間の正しいあり方、老子でいえば道ということになりませんが、それが分からなくなっていくことなのです。こうなることをこの章では、強大なものは、下なる世界へ落ちて行き（進化から言えば、弱肉強食・適者生存的な動物の世界へと墮して行く）、上なる世界（より人間的な聖なるところ）に昇って幸せに憩うことができなくなっていく、と言っているのです。

結論を先に言いましたので、もう少し敷衍（ふえん）して述べてみたいと思います。

もう亡くなりました深沢七郎という作家の小説に「楢山節考」というのがありました。それは、貧しい農村で、生産に役立たなくなった老人は、降りてこられないよう

な険しい山へ担ぎ上げて捨てる、ということをやテーマとするものだったと思います。

この話のように、年老いた親を山に捨てなければならぬというのには、家族としては弱い家族だと思えますが、でも、私は、この話は人間のあり方としてきわめて深い真理を表しているように思うのです。自分の親を背負って捨てに行かなければならないことは、人間としての弱さを表すもので、それは、いかにも悲しいことと言えますが、しかしその死は、新たな、より若い生命の誕生や成長、生存のためであり、この悲しみを通じて、私たち人間の真の生き方を示しているように思うのです。

私たち人間は、悲しいかな、自分が強くなるほど他者の悲しみや痛さが分からなくなるのです。自分が傲慢になり、「人の心を感じるころ」が枯れていくのです。

『楢山節考』のように、悲しみを味わいながら、自己の生命の延長のみを願うのではなく、社会に迷惑をかけるだけでお役に立てなくなったり、社会体制として自ら死を選んでいく生き方は、実は、その悲しみを通じて、人に対する思いやりのある、温かい社会を出現させて行くと言えるのです。それは、自己が死を選択するという生命としての弱さの故に、人間としてかえって幸せな社会になっていると言えるのです。老子の言うように、柔

弱なものの上に憩う、と言えるのです。

これは、なにも『檀山節考』だけで言えることではありません。社会の中の障害児・者の存在についても同様に言えることなのです。私は、これまで障害児・者を「弱者としての強者」、普通児・者を「強者としての弱者」として捉えて来ました。

それは、障害者という弱者の存在こそが、多くの強者としての普通の人たちに、自己の存在の意味を教えている、と考えられるからなのです。言い換えますと、障害者（老人も同様ですが）の存在を納得しようとし、私たちが一人一人の思いや計らい（健常で生まれて欲しい、いつまでも生きていたい）を超えたものの存在を考えないではおれないからなのです。私たちがこの世に贈った贈り主のことを考えなければ、その存在を納得することができないからなのです。

実は、それは障害者だけのことではないのです。私たちが一人一人が、みんな私たち人間を超えた贈り主によって、「ただ贈られてある」だけなのです。そして、その贈り主（絶対他者）の下では私たちは誰でもが弱い存在なのです。そのことを深く知るとき、私たちは「他己」を取り戻し、他者に対して、思いやりを持ち、温かくふるまうことができるようになるのです。

この贈り主を、神と思おうが、仏と思おうが、道と思おうが、空（無）と思おうが、変わりはありません。それは、この世の存在を超えて、存在を存在たらしめる、絶対、無限、永遠なるものなのです。

私たち人間は、こうした人間存在の実存構造を、弱者の存在を通じて知ることが出来るのです。

この構造を知ることによって、他者に定位し、自己を安定させ、自己の統制と他者への奉仕を実行することができるようになるのです。

本章は、多くの解説書が言うように、相対な人間同士の強弱や争いのことを言っているのではないのです。分かりやすくするために、兵力のような例を使ったため、かえって間違った解釈を生んだようです。

現代は、「自己社会」が、どんどんとその程度を増しながら進行しています。自己の正当性を互いが主張し合い、数の多さ（派閥・民族・宗教などの）や、力の強さ（経済力・文明力）によって、その主張が通っていきません。それが、たとえ「道」に外れたものであってもです。その前では、少数者や弱者たる「他者のこころ」は無視されて行くのです。

この章で述べていることは、そのまま現代にこそ、当てはまるものと言えるのです。

自作随筆選

宗教のパラドックス

宗教心のある人を、信仰のあつい人、信心な人という言葉で表しますように、宗教にとって信じることは本質的なことだと思われまます。

ところが、困ったことに、人は何かを信じますと、他のことが信じられなくなってきました。一つの価値が正しいと思いがちになると、それに執らわれて他の価値が間違いだと思ってしまうのです。別の価値の正しさを信じることができなくなってしまうのです。

宗教にとって信じるのが大切なのに、信じると過ちを犯す危険があるとは、皮肉なことです。宗教は過ちを犯さないようになるためのものでもあるのに、そうなるうとする、かえって過ちを犯すようになるというわけですから、困ったことです。現実にはこれまでの宗教の歴史を見てみますと、多くの宗教がそうなっているように思えます。

このパラドックスを抜ける道は、どこにあるのでしょうか。それは、信じるものは違っても、宗教的に言えば

戒律を、一般的に言えば規範（秩序）を守って、他者の存在と響存し、他者の存在を許すことです。

宗教は最終的には「自我 人格」機能領域である、生き方に関わるものですが、しかし、人間にはもっと大切な、「無意識」や「情動 感情」機能領域もあります。

この情動・感情機能領域の世界で言いますと、自分を制御し、他人を立てる「仁」の徳が大切なのです。宗教的な生き方も本当はこの「仁」の体得を目指そうとするものなのですが、「自我・人格」の働きとして自分が設定した建前に執らわれてしまって、「仁」の働きが麻痺してしまうのです。

何かを信じるときは、いつもこのことを反省しなければなりません。

自作詩短歌等選

分析好き

野に咲く百合

現代人

小さくも

ちがいはかりを

野に咲く百合は

知りたがり

そこに相い

自己弁護と嘘

いま

多くの人が
嘘も方便とばかり
嘘をついている

ことばが

心を失って

自己弁護や自己主張の
道具となっている

国会の

証人喚問しかり

さまざまな集団の

弁明記者会見しかり

弁解で

嘘をついても

犯罪にはならない

でも

それがマスコミで

報道されるとき

人の心を

荒れさせる

ヨーガはこわい

ヨーガ（密教）は

こわい

間違えば

オウム真理教

自己絶対化と

狂信と

子は親の鏡

子は

親の鏡

子は

ペットではない

ストレス解消の

手段ではない

言うことを聞かす

奴隷ではない

自らを

育てる気持ち

子育ては

生き方を求むる職

いきかたを

求むる職に

ありながら

無明の間を

さまよえし

多くの衆生

見るにつけ

今世の樂園

遠き思ひす

早朝ジョギング

早朝の

ジョギング見てる

月見草

墮落と精進と

人生は
思う通りに
行かぬのが
当たり前だと
あきらめて
墮落したまま
暮らしたら
いつか病の
苦しみが
墮落のその身に
ふりかかる
いつかは死ぬる
苦しみが
弱き心に
ふりかかる

ああ人生は
ままならぬ
しかし考え
入れ換えて
ひたすら精進
重ねたら
人間だけに
許される
無上の大樂
訪れて来む

釈尊のごとば（三八）

法句經解説

（一四二）身の装いはどうあるとも、行い静かに、心おさまり、身をととのえて、慎みぶかく、行い正しく、生きとし生けるものに対して暴力を用いない人こそ、（バラモン）とも、（道の人）とも、また（托鉢遍歴僧）ともいふべきである。

「身の装い」とは、この前の（一四一）偈で述べていましたような、裸かの行をしたり、鬚（まげ）を結ったり、身を泥にまみれさせたりすることを言っています。こうした身の装いがどんなものであろうと、次のような「状態」にある人こそが、バラモンであり「道の人であり」托鉢遍歴僧であると言えるというわけです。どんな「状態」になればよいかについては、後で検討することにして、まず、そう言ったときバラモンと呼べるという、そのバラモンについて説明しておきたいと思います。

釈尊の時代のインドでは、社会階層が大きく四つに分かれていました。上からバラモン（司祭者）、クシャトリア（王族）、ヴァイシャ（庶民）、シュードラ（隸民）の四つです。この最上位のバラモン階級が僧侶でしたか

ら、真の僧侶という意味でバラモンということばを使っているのだと思います。釈尊の説かれた教えが、バラモン教であるという意味ではありません。

さて、どんな「状態」になったとき、バラモンと呼ばるかということですが、それは「行い静かに、心おさまり、身をととのえて、慎みぶかく、行い正しく、生きとし生けるものに対して暴力を用いない」ということです。

この最後の、暴力を用いないという点につきましては、説明するまでもなく、誰でもがお分かりのことだと思っておりますが、でも、最近、世界的にみて、暴力を肯定する発言や実際の暴力事件が多発していることを見ても、この教えを守ることがいかに難しいがよく分かります。しかし、少なくともこの戒律を守らなければ、人類に将来はないように思うのですが。

続いて「状態」について順次見ていきます。

まず、「行い静かに」ということですが、これは、日常の行為が静かである、ということも含まれているでしょうが、それよりも、心を静かに保つ修行をすること、つまり、ヨーガや瞑想などをするを言っているのだと思います。道元禅師は、生活すべてを坐禅とされましたから、まさしくこの「行い静かに」に当たっていると思います。私たちも日々、十分でも二十分でも結構です

から、じつところを静かにして瞑想・ヨーガなどをする時間を持ちたいものです。

次の「心おさまり」ですが、これは、行いを静かにしていれば、結果として実現される心の状態です。心のわだかまりやストレスが、行い静かにすることで、洗い流して行くというわけです。

フロイトという心理学者（精神分析学者）が言いましたように、私たちは、いやなことは思い出さないように、無意識に閉じ込め（抑圧し）てしまいます。そんなことが続きますと、無意識はいやなこととどんどん膨らんでいくこととなります。

人間の背負っている業の一つだと私は思うのですが、自分の行動、特にここを意識してコントロールすることはとても難しいことなのです。ここは意識ではなくて、多くは無意識の影響をうけて動くのです。例えば、私たちは気付かないうちに、他人よりも優れたという思いをもっていますし、異性にはどうしても目を奪われやすいですし、ときには美味しいものが食べたくなつて来ますし、美味しいものだとつい貪って食べてしまうものです。お酒や煙草は止めようと思っても、意識してやめることは難しいですし、他者には思いやりを持つと思っても、自分が不愉快なことがからみますと、なかなか

かできません。

では、こうした無意識の影響をどうすれば逃れることができるのでしょうか。普通は、本を読んだり、人の話を聞いたりすれば、こころが制御できると考えられますが、本当にそうなのでしょうか。

実は、人間は、難儀なもので、どんなに意識できるところで本を読んだり、話を聞いたり、聞いてもらったり、あるいは、スポーツをしたりして開発してみても、その効果は無意識には殆ど及ばないのです。

無意識の影響を逃れるには、意識を開発しただけではだめなのです。そのためには、最初に述べましたように、行い静かにすることが必要なのです。それによつて、意識を滅して無意識に降りて行くことができます。そうすることで、そこにたまった、ストレスやわだかまりの垢をきれいに洗い流すことができます。それは、私の理論で言いますと、無意識の生命蔵識と如来蔵識の統合をはかることと言えます。そうなったとき、自己への執らわれを脱して、他者と一体化することができるのです。それは、「こころをおさめて」、自分の欲望や気分や感情の統制が自由になり、他者に対してこころを開き、他者と悲しみや喜びを共にすることができるといふことでもあるのです。

最後に残った、「身をととのえて、慎みぶかく、行い正しく」という部分に移ります。これらは、いずれも戒律を守ることを言っていると思います。釈尊は、誰でもが守るべき戒律として五戒をあげられました。それらは、殺すな、盗むな、邪な男女関係を持つな、嘘をつくな、酒を飲むな、です。仏教では後に、十善戒が定められました。それらは、不殺生、不偷盗、不邪淫、不妄語、不綺語、不悪口、不両語、不慳貪、不瞋恚、不邪見、です。

五戒の「酒を飲むな」ですが、私は、これは現代の日本では、健康のためにたしなむ程度のを禁止するものではないと思つています。酔っぱらうほど飲んではならない、といつて思えるように思えるのです。また、この戒律はお酒だけではなく、たばこや大麻、麻薬などの薬物も含まれているように思えます。アメリカでは、この戒律は全く守られなくなつてしまつています。年々、若年のアルコール依存症や麻薬中毒症が増加の一途をたどつています。現代社会の世界的な病理現象の象徴のよう

に思えるのです。このように、この偈は僧侶に対して説かれたものですが、在家の者にも大きな示唆を含んでいるように思われます。

（一四三）みずから恥じて自己を制し、良い馬が鞭を気につけないように、世の非難を気につけない人が、この世に誰か居るだろうか？

分かり難い文章で、分かり難い内容であるように思えます。「良い馬が鞭を気にしないように」という部分を括弧に入れて読んでみますと、「みずから恥じて自己を制し、世の非難を気につけない。そんな人はこの世に居ない。」と読めます。

しかし、この偈の内容に反して、実は、釈尊のように解脱に達した人は、自ら恥じて自己を制することができませんし、また、世の非難を気につけないこともできるのです。ですから、この偈は、まだ解脱していない人を対象にしたものだと言えます。そこが、この偈の理解を困難にしているゆえんだと思います。

この偈の通り、一般の人は、世間の非難が恐ろしくて、それを頼りに、自己を制しているのです。もし、世間が何も言わなかったり、あるいは世間が非難しなかったりすれば、自己を制することができなくなってしまうのです。

私は、先月号の本誌に次のような詩を載せました。
「人が怖いもの」 人が／失うのを／怖がるものは／世

間／と／生命／／でも／それを克服しないと／本当の幸せは／こない

この詩にもありますように、普通の人は、人々を通過させあつてのみ、安定していることができるのです。ですから、世間を失いますと、自分が不安定になり、何のために生きているのかが分からなくなって行きます。そして、自分は、不幸だと感じるようになっていくのです。ですから、世間から非難されて、世間を失うことはとても怖いことなのです。

最後に、括弧に入れた「良い馬が鞭を気にしないように」という部分を検討しておきます。

このたとえの「良い馬は」解脱した人に、「鞭」は世間の非難に、それぞれ当たっていると思います。ですから、このたとえは、解脱した人は世間の非難を気にしない、という意味になります。結構、難しい比喻だと思います。因みに、私がこの訳を使わせていただいています、中村元先生著『真理のことは 感興のことは』（岩波文庫）の解説に、この偈をここに載せてある先生の訳とは別の訳をする人がいることが紹介されています。

この偈は、次の偈に続いています。友松圓諦著『法句経』（講談社刊）では、次の偈の出だしを、この偈の後半に取り入れています。来月号をご覧ください。

後記

一、大学もやつと夏休みに入りました。去年から七月いっぱい授業が続くように教育課程が変わりました。冷房のない部屋で、汗をふきふき、開け放つた窓からの騒音（庭の手入れをする刈り込み器械の音）に悩まされながら大声を張り上げてする授業は、いささかきついものです。いまどき、と思えてしまいます。

二、七月末、和歌山大学時代のゼミ生の一人が、十数年ぶりに鳴門へ訪ねてきてくれました。その人は卒業後、和歌山県の養護学校の先生をしているのですが、ひさしぶりに和歌山の話をしました。

三、私も、その頃と較べれば、まったく変わったと自分では思っているのですが、あまりそうも感じないようでした。外見だけは、歳もとり、長髪から丸坊主になっていますし、体重も当時からいえば、十キロ以上も減らしていますので、その人は、道で会っても分からないだろう、と言っていました。

四、いつものように、朝は五時前後には起きて、ヨーガとお勤めをしますが、このところ、その後で犬の散歩を兼ねてジョギングをしています。二十〜三十分程度、犬に合わせて走ったり、歩いたりしています。終わると、汗びっしょりになります。夕方も同じコースを走ってい

ます。とても爽快です。

五、私の家系には、糖尿病の気があります。祖父も父も糖尿病に罹りました。私も昨年、生まれてはじめて尿に糖がおりていると言われ、精密検査をうけました。その結果、治療をうけるほどではなかったのですが、六五キロぐらいいまで体重を落とすこと、運動をすること、を勧められました。それ以来、その目標を心掛け、大体達成しているのですが、ジョギングもその一環なのです。

六、健康は、ストレス管理と食べ物（空気、水、嗜好品も含む）と運動で決まります。皆さんもどうぞ節制におつとめ下さい。

| | |
|--|---|
| 月刊 こころのとも 第六卷 八月号 (通巻 六十八号) | 平成七年八月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 (ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>（ひびきのさと）</small> |
| 本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660 | |